

各関係機関・団体長 様

愛媛県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）

このことについて、9月の予察情報を送付します。

病虫害発生予報（9月）

令和6年8月30日
愛媛県

1 気象予報（高松地方气象台）

1か月予報（令和6年8月22日発表）の解説

向こう1か月の天候の見通し 四国地方（8月24日～9月23日）

【1か月の平均気温・降水量・日照時間】

	平均気温（1か月）	降水量（1か月）	日照時間（1か月）
四国地方	低 10 並 10 高 80% 高い見込み	少 20 並 30 多 50% 多い見込み	少 40 並 30 多 30% ほぼ平年並の見込み

【予報のポイント】

- ・向こう1か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため高いでしょう。2週目は気温がかなり高くなる可能性があります。
- ・向こう1か月の降水量は、湿った空気の影響を受けやすい時期があるため多いでしょう。

2 病虫害の発生予想

水 稻

(1) いもち病（穂いもち）

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

- (ア) 8月中旬の定点調査（早期・普通期）では、平年並の発生である。
- (イ) 8月の広域調査（同）では、圃場によって差はあるものの平年並の発生である。
- (ウ) 8月1～22日までのBLASTAMによる葉いもち感染好適条件出現の判定では、感染好適日が5地点で1～3回で認められたが、それ以外では感染好適日は出現しておらず、出現回数は少ない（病虫害防除所ホームページ掲載データ参照）。
- (エ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い、日照時間はほぼ平年並の見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 葉いもちの発生が上位3葉まで認められる圃場では、出穂期防除は必ず実施する。さらに、出穂後に天候不順が続く場合には、出穂10～15日後の仕上げ防除時に、本病に効果のある薬剤を追加する。

(2) 紋枯病

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

- (ア) 8月中旬の定点調査では、早期で平年並、普通期でやや少の発生である。
- (イ) 8月の広域調査（早期、普通期）では、平年に比べ少ない状況である。
- (ウ) 普通期の茎数は、平年に比べ多い。
- (エ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 出穂後は株内湿度が高まりやすいため、発病状況を観察し、上位進展が認められる場合には早めに追加防除を実施する。
- (イ) 止葉から下位3葉の葉鞘に病斑を生じると収量に影響する。
- (ウ) 薬剤防除は、薬剤が株元まで到達するように行う。

(3) トビイロウンカ

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 8月中旬の定点調査では、30圃場中（早期、普通期）1圃場で発生を認めている。
- (イ) 8月の広域調査（同）では、3.4%の圃場（南予3圃場、中予12圃場）で発生を確認しており、
平年並の発生である。
- (ウ) 県下6か所に設置している予察灯では、7月5日に愛南町で飛来を初確認（1頭）したが、
それ以降は、各地点とも8月第4半旬まで未確認である（病虫害防除所ホームページ掲載データ参
照）。
- (エ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 出穂期防除は必ず実施する。
- (イ) 本虫は株元に寄生し、高温年には短期間に密度が高まり、収穫前に坪枯れを引き起こすこと
があるため、下葉の枯死や田面の黄変などに注意する。
- (ウ) 8月中～下旬の要防除密度は、払落しで10株当たり成幼虫数が30～50頭である。この密度に達
した圃場では9月中旬以降に坪枯れの恐れがあるので、定期防除は必ず実施し、その後の発生動
向に注意を払う。

(4) 斑点米カメムシ類

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 8月中旬の定点調査（普通期）では、本田での発生圃場率、掬取り虫数ともに平年並である。
畦畔雑草では、発生地点率、掬取り虫数ともにやや多の発生である。
- (イ) 斑点米カメムシ類の主要発生種は、ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、アカスジカスミカ
メであるが、イネカメムシの発生が認められる圃場が増加している。
- (ウ) 8月の予察灯によるミナミアオカメムシの誘殺数は、西条市で平年より多くなっているが、そ
の他の地点では平年並である（病虫害防除所ホームページ掲載データ参照）。
- (エ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、現在の発生傾向が続くもの
と見られる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 要防除密度（本田乳熟期の捕虫網による20回掬取り虫数）は、大型種は1頭、小型種は3頭で
ある。
- (イ) 水稻の依存性が高いミナミアオカメムシ、クモヘリカメムシは本田内で繁殖するため、出穂以
降も圃場観察に努め、発生を確認した場合は早急に防除を実施する。
- (ウ) 防除は地域の防除指針に基づき、乳熟期～糊熟期（出穂期から10～15日）を目安に実施する。
なお、その後も多発する場合は、薬剤の収穫前日数を遵守しながら、7～10日後に追加防除を実
施する。

かんきつ

(1) かいよう病

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

- (ア) 8月中旬の定点調査では、葉の発生はやや少、果実での発生は少である。
- (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 発病果や発病枝葉は早期に除去し、園内の病原菌密度の低下を図る。
- (イ) 強風により付傷すると発病が助長されるので、台風襲来前後の薬剤散布や防風対策を講じる。
- (ウ) ミカンハモグリガの食害痕は病原細菌の侵入箇所となるので、防除を行う。
- (エ) 甘平、愛媛果試第48号、はれひめ等の罹病性品種は注意する。

(2) 黒点病

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

- (ア) 8月中旬の定点調査では、やや少の発生である。
- (イ) 気象予報では、降水量は多い見込みとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 枯死枝は早期に除去し、園外で適切に処分する。
- (イ) マンゼブ剤およびマンネブ剤の散布間隔は、累積降水量が200～250mm（または散布後30日）に
達した時である。ただし、本病に対して罹病性が高い品種（せとか、河内晩柑、清見等）の散布
間隔は、累積降水量150～180mm（または散布後25日）とする。

(ウ) 年内に収穫する品種では、収穫時期を考慮して薬剤を選択する。

(3) ミカンハダニ

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 8月中旬の定点調査では、寄生葉率は平年並、1葉当たり雌成虫数はやや多の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、現在の発生傾向が続くものと見られる。

ウ 防除上の注意

(ア) 園内の早期多発樹で、1葉当たりの雌成虫が平均2～3頭に達した時期が防除の目安となる。

(イ) 秋季は果実や葉裏への寄生が増加するので、薬剤はかけむらのないように散布する。

(4) ミカンサビダニ

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

(ア) 8月中旬の定点調査では、発生を確認していないが、巡回調査で発生を認めている。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 被害果はその後の発生源となるため、早期に除去し、適切に処分する。

(イ) 被害は局所的に発生しやすいので、園地観察を行い、発生を確認したら早急に防除する。

(ウ) 高温乾燥条件が続く場合は、11月頃まで加害が継続するので注意する。

か き

(1) 炭疽病

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

(ア) 8月中旬の定点調査では、果実の発生は平年並である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 園地観察に努め、発病枝及び発病果実は早期に除去し、園外で適切に処分する。

(イ) 果実の感受性が高まる時期となるので、常発地では定期防除に努め、天候不順が続けば追加防除を実施する。

(2) うどんこ病

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

(ア) 8月中旬の定点調査では、やや多の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 気温の低下とともに葉裏に白色粉状の菌叢を生じてくるので、防除に当たっては、薬液が葉裏に十分かかるように散布する。

(3) フジコナカイガラムシ

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 8月中旬の定点調査では、平年並の発生である。

(イ) 第2世代の発生期に果樹カメムシ類の防除を頻繁に行った園地では、リサーチェンスにより多発することが多い。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 8月中～下旬の防除時期に散布を行った園地では、その3週間後に2回目の防除を行う。

(イ) 本虫はヘタと果実の隙間に多く寄生するため、薬剤が十分付着するように散布する。

果樹共通（かんきつ、かき、キウイフルーツ）

(1) 果樹カメムシ類

（令和6年7月19日付け令和6年度病害虫発生予察警報（第1号）参照）

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 8月の予察灯及び集合フェロモントラップによる誘殺数は、7月下旬～8月上旬のピーク時に比べ大きく減少しているが、依然として平年より多い地点が見られる（表1、病害虫防除所ホームページ掲載データ参照）。
- (イ) 8月中旬に行った広域調査では、前月に比べ被害果率はかんきつはやや増加、かきでは2倍以上に高くなっているが、キウイフルーツでは減少している（表2）。
- (ウ) 県内17地点（8月中旬調査）のヒノキ球果の結実量は、全ての地点において少ない（表3）。
- (エ) ヒノキ球果のカメムシ類寄生虫数調査（10回掬い取り）では、平均捕獲虫数は1.5頭/地点（平年2.2頭）であり、平年に比べ少ない（表3）。
- (オ) 山林からの離脱の目安となるヒノキ球果の口針鞘数は、12.6個/球果（平年6.5個）であり、平年と比べて多い。また、新成虫がヒノキを離脱する目安とされる口針鞘数25個/球果に達している地点も見られる（表3）。
- (カ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられるが、球果の結実量が極めて少なく、口針鞘数が多いことから、新成虫の園地への飛来時期が早くなることが予想される。

ウ 防除上の注意

- (ア) 飛来時期や飛来量は園地により異なるため、園地観察を行い、発生を認めたら、各地域の防除暦に従い速やかに防除を行う。
- (イ) 主に山林から果樹園に飛来するため、山林に近い園地で被害が多い傾向にあるので注意する。
- (ウ) 台風等の通過後、果樹園への飛来が急増する場合があるので注意する。
- (エ) 収穫期が間近となる果樹では薬剤の選択に注意する。

表1 8月第3～4半旬の期間の果樹カメムシ類誘殺数

	誘殺数（頭）						
	予察灯				集合フェロモントラップ		
	R6	平年	平年比	H8 ^{注)}	R6	平年	平年比
西条市丹原町	-	-	-	-	778	302.2	2.6倍
西条市西泉	169	51.6	3.3倍	102	-	-	-
松山市上難波	186	132	1.4倍	79	807	252.8	3.2倍
松前町大間	15	4.7	3.2倍	12	-	-	-
久万高原町入野	63	83.3	0.8倍	186	-	-	-
松山市下伊台	559	158.5	3.5倍	6	243	49.6	4.9倍
西予市宇和町	106	217	0.5倍	223	-	-	-
宇和島市吉田町	178	57.6	3.1倍	373	1021	72.9	14倍
鬼北町興野々	394	1648.7	0.2倍	-	3864	403.6	9.6倍
愛南町御荘	163	146.9	1.1倍	206	-	-	-

注) H8年は、警報が発表された年

表2 広域調査における果実被害状況

地域別	樹種	7月中旬			8月中旬			(参考) 警報発表年 (H8)の被害 果率(%)
		調査 園地数	被害 園地率 (%)	被害 果率 (%)	調査 園地数	被害 園地率 (%)	被害 果率 (%)	
東予	キウイフルーツ	15	100	28.1	25	100	19.8	25.3
	かき	20	90	6.6	20	95	23.7	47.5
	かんきつ	17	88.2	6.6	20	45	4.4	1.1
中予	キウイフルーツ	13	100	30	19	100	21.2	18.8
	かき	11	100	18.5	12	100	34.3	13.8
	かんきつ	16	81.3	7.3	20	60	10.3	0.5
南予	キウイフルーツ	11	100	62.3	21	100	27.9	65.2
	かき	19	89.5	11.2	20	95	15.9	61.0
	かんきつ	21	61.9	3.9	25	64	5.5	7.6
県全体	キウイフルーツ	39	100	38.4	65	100	22.8	35.7
	かき	50	92	11	52	96.2	23.1	42.2
	かんきつ	54	75.9	5.7	65	56.9	6.6	3.0

注1)H8年の調査は8月下旬に実施。

注2)調査は主に樹上に残っていた果実について行った。

表3 ヒノキ球果調査結果(2024年8月中旬調査)

調査地	結実量	10回掬い取り虫数						合計	口針鞘数／ ヒノキ1球果
		チャハネアオ		ツヤアオ		クサキ			
		成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫		
新居浜市船木	極少	-	-	-	-	-	-	-	-
西条市丹原町田滝	極少	-	-	-	-	-	-	-	-
西条市丹原町来見	極少	-	-	-	-	-	-	-	25.5
今治市大西町宮脇	極少	-	-	-	-	-	-	-	5.4
今治市大西町脇	極少	-	-	-	-	-	-	-	15.9
松山市立岩	極少	0	0	0	0	0	0	0	25.9
松山市難波	少	3	0	0	0	0	0	3	6.8
松山市粟井	極少	0	0	0	0	0	0	0	3.0
松山市伊台	極少	-	-	-	-	-	-	-	10.7
松山市菅沢	極少	-	-	-	-	-	-	-	-
松山市久谷	極少	-	-	-	-	-	-	-	-
久万高原町明神	極少	-	-	-	-	-	-	-	-
内子町五百木	やや少	3	0	0	0	0	0	3	8.2
内子町五十崎	極少	-	-	-	-	-	-	-	-
西予市城川町土居	極少	-	-	-	-	-	-	-	-
西予市宇和町西山田	極少	-	-	-	-	-	-	-	-
愛南町城辺緑	極少	-	-	-	-	-	-	-	-
平均 (R6)		1.5	0	0	0	0	0	1.5	12.6
平年値 (H26～R5)		1.4	0.7	0.1	0	0.1	0	2.2	6.5
今年の順位 (H26～R5)		4	10	8	6	8	7	7	2

注) - : 未調査

着色した地点は球果がすくないため、今年新たに加えた地点。

野菜

(1) 黄化えそ病 (夏秋きゅうり)

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 8月中旬の定点調査ではやや少の発生で、媒介虫のミナミキイロアザミウマの発生はやや多である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 発病株は直ちに抜き取り、適切に処分する。

(イ) 発生圃場の栽培を終了する場合は、きゅうりの株元を切断して枯死させ、保毒虫が長期間残存しないようにする。

(ウ) 媒介虫の卵・蛹には薬剤の効果が劣るので、発生圃場では5～7日間隔で2～3回防除する。

(エ) 媒介虫は雑草等でも増殖するので、圃場内外の除草を行う。

(2) 炭疽病 (夏秋きゅうり)

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

(ア) 8月中旬の定点調査では、平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 草勢低下、窒素肥料の過多は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。

(イ) 老化葉や発病葉は早めに除去し、適切に処分する。

(ウ) 発病初期の防除に重点を置き、薬液が葉裏までかかるように散布する。

(3) 褐斑病（夏秋きゅうり）

ア 予報の内容 発生量：多

イ 予報の根拠

(ア) 8月中旬の定点調査では、やや多の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 草勢低下、窒素肥料の過多は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。

(イ) 老化葉や発病葉は早めに除去し、適切に処分する。

(ウ) 発病初期の防除に重点を置き、薬液が葉裏までかかるように散布する。

(4) 炭疽病（いちご）

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 8月中～下旬の定点及び広域調査（育苗床）では発生を認めていないが、巡回調査では発生を確認している。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 葉柄や小葉に病斑が見られる株や萎凋株は徹底して除去し、感染源を圃場外に持ち出し、適切に処分する。

(イ) 不要な下位葉や古葉は除去し、株内の湿度を下げる。

(ウ) 雨滴や灌水の飛沫とともに胞子が飛散するので、灌水時には水滴が跳ね上がらないよう注意を払う。また、夕方遅くの灌水は避ける。

(エ) 過繁茂にならないよう追肥量に注意する。

(オ) 発病してからでは防除効果が劣るので、定期的な薬剤防除に努め、薬液が葉裏までかかるように散布する。特に、降雨後に被害が拡大するので、降雨前に防除を行う。

(5) アブラムシ類（いちご、さといも、夏秋野菜全般）

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 8月中旬の定点調査では、いちご育苗床、さといも、夏秋きゅうり、夏秋トマトで平年並、夏秋なすでやや多の発生である。

(イ) 8月の黄色粘着トラップによる有翅アブラムシの誘殺数は、少なく推移している（病虫害防除所ホームページ掲載データ参照）。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により早期発見に努め、低密度時に防除する。

(6) ハダニ類（いちご、さといも、夏秋野菜全般）

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 8月中旬の定点調査では、いちご育苗床、さといもでやや多、夏秋なすでやや少の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により早期発見に努め、低密度時に防除する。

(イ) 同一薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。

(ウ) ハダニ類は雑草でも繁殖するので、圃場内外の除草に努める。

(7) ハスモンヨトウ（いちご、さといも、大豆、夏秋野菜全般）

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 8月中旬の定点調査では、さといもで平年並、いちご育苗床でやや少の発生である。

(イ) 8月の性フェロモントラップによる雄成虫の誘殺数は、7地点中2地点で多、3地点で平年並、2地点でやや少で推移している（病虫害防除所ホームページ掲載データ参照）。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。

(イ) ふ化～若齢幼虫の分散前の加害葉（大豆では白変葉）の除去に努める。

- (8) シロイチモジヨトウ（夏秋野菜全般）
- ア 予報の内容 発生量：並～やや多
- イ 予報の根拠
- (ア) 8月の性フェロモントラップによる雄成虫の誘殺数は、5地点中2地点でやや多、3地点で平年並で推移している（病害虫防除所ホームページ掲載データ参照）。
- (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。
- (9) オオタバコガ（夏秋野菜全般）
- ア 予報の内容 発生量：並～やや多
- イ 予報の根拠
- (ア) 8月中旬の夏秋トマトの定点調査では、発生を認めていない。
- (イ) 8月の性フェロモントラップによる雄成虫の誘殺数は、5地点中1地点で多、3地点で平年並、1地点で少で推移している（病害虫防除所ホームページ掲載データ参照）。
- (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。

【病害虫発生予察情報】

愛媛県病害虫防除所ホームページでご覧になれます。

ホームページアドレスは、<https://www.pref.ehime.jp/site/byocyubojo/>

【農薬使用時の注意】

- ◎農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定しましょう。
- ◎農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては、適用作物、使用回数、使用時期、使用濃度、使用量、使用方法等の使用基準を遵守しましょう。
- ◎病害虫等の発生を的確に把握し、適時適切な経済防除に努め、農薬や労力等の低投入を図るとともに、低毒性農薬を使用しましょう。
- ◎農薬による防除のみに頼らず、耕種的防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除を推進しましょう。
- ◎同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫の出現や助長をまねくので、農薬のローテーション使用を心掛けましょう。
- ◎農薬の使用にあたっては、当該散布場所の地形、当日の気象、養蚕、養蜂、その他の環境条件を考慮し、周辺環境に影響の少ない薬剤を選定するとともに、危害の未然防止や環境の保全に努め、農薬事故防止対策を徹底しましょう。
- ◎農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容、使用上の注意事項等を遵守し、農薬の散布にあたっては、農薬の種類に応じた保護具を必ず装着しましょう。
- ◎農薬の保管管理や取り扱いに注意し、紛失、盗難等の未然防止を図りましょう。